

講演Ⅱ 「学校での教育システムの構築に向けて」 —課題と対応—

中川美穂子



1 飼育のよさと課題

学校の飼育動物はいろいろと良いことはあります。たとえば、これは東京都での調査ですが、葛飾区の小学校49校のうち27校がお返事をくださいました。つまり、この27校しか動物を飼育していないということになります。その中で、先生方は「もっと子どもたちに動物と触れ合させたい」と考えているという結果が出ました。ちょっと余談になりますが、校長室でモルモットを飼っている小学校があります。その学校の一人の児童が不登校気味であり、夏休みを過ぎた頃から学校に来なくなってしまいました。そこで、校長先生がこの児童を校長室のモルモット係に校長先生が任命し、「家から餌をもってきてモルモットを世話したら、シールを貼りますよ」と校長先生がおっしゃったら、喜んで登校するようになり、ほかの友達とも良い関係が築けるようになったということです。このように、飼育にはいろんな良い効果があるのです。さて、先ほどの葛飾区の27校に飼育で困ることは何かと聞いたところ、休日の管理、児童の衛生問題等、いろいろ課題が挙げられました。それから、東京都教育委員会を通じて、都内全62市町村に飼育上の課題を聞いてみたところ、33市町村が課題があると答えました。その他の地域はたぶん課題に気づいていないのではないかと思います。その課題の内容も、やはり、休日の世話がいちばんで、次いで、子どもたちに対する衛生問題でした。また、教育委員会の立場

として、適切な飼育方法ということも挙げられていましたが、先ほどの小学校への調査では、適切な飼育方法は課題としてあげられていませんでした。獣医師から見ると適切な飼育方法こそが「課題」であるとは思いますが…。

2 休日の世話

これへの対処方法ですが、現段階では、金曜日に餌を多く与えて月曜日まで放つておくというのが、全国的に見ても学校でいちばんよく見られます。一方で、警備員に依頼しているという回答もありました。また、地域のボランティアにお願いする場合もあります。これは、近所の動物好きの方が学校に来て世話をしてくれるということで、学校にとっては非常に便利なことかと思います。しかし、ボランティアの方は動物を好きだから何年も引き受けてくださいますので、やがて飼育に対して口を挟むようになってくることがあります。そうする中で、このウサギはかわいそうだから引き取りたいと言って問題になった事例が何件かありました。そして、教育委員会に「あの学校では動物を飼わせないでくれ」と訴えたりすることもありました。私がそのボランティアの訴えた学校や幼稚園に伺ったところ、どこもきちんと飼育していました。ということは、ボランティアが、その要求度からすると、耐えられない状況であったということです。つまり、そのウサギに情が移ってしまって引き取りたくなってしまうのです。このようなことも起こり得るということを学校は考えておく必要があります。やはりいちばん良いのは、動物よりこどもが大事と自覚している保護者の協力を得ることだと思います。

3 保護者の支援を得る

抄録に「保護者が休日に預かったり、あるいは登校して世話をを行う教室内飼育」を8年も続けておられる筑波大附属小の森田先生からいただいたアンケートがありますが、これは、教室内飼育を行うときに保護者に行うアンケートです。その10番に、休日に家庭への持ち帰りについて、どのよう

に考えているか。という質問があります。その回答として、40人中、「良い」が10人、「责任感が生まれる」が6人、「自分だけのペットとして可愛がることができる」、「家庭で問題がなければ大丈夫」、「どちらかというと良い」。これらを合わせると30人くらいになります。後の10人が否定的な考えを言っても、結局は持ち帰ることになったわけです。また、「希望者だけで動物を飼育することについてどう思いますか」という質問に対し、「とても良い」と回答した方もいましたが、大半は、「どちらかというと良くない」や「みんなで飼育した方が責任感や連帯感が生まれる」ということでしたので、結局はみんなで飼育するということになりました。ということで、結局は保護者が支援する形になったということです。そこで、このような保護者の協力を得る方法ですが、筑波大附属小の場合はクラス単位で実施していますので、クラスの中だけで完結します。しかし、学校によっては全校に募集することができます。1年から6年までの家庭に対して募集をすると、動物好きの家庭は手を挙げてくれます。ただ、1年生の家庭であれば、6年間継続しなければならなくなります。先日もある小学校の道徳事業研究会の公開講座でそのことに関する質問が出て、「1年生の母親ですが、自分は引き受けたものの、だんだん世話ををするヒトが少なくなり、負担がどんどん増えてくる」という訴えで、「自分が止めると動物がかわいそうなので、何とかしてくれ」ということでした。したがって、全校から募集ということはなかなか大変かもしれません。それから、飼育委員会の保護者に手伝ってもらうということも良いと思いますが、飼育委員会は非常に人数が少ないですから、大きな負担になるということです。一方で、学年飼育の場合、最近結構出てきましたが、3年生、4年生に飼育を位置づけた場合、3クラスあれば100人近くいますので、これが結構安定した力になるようです。

その時に考えていただきたいことは、動物が何のために飼われているのかということです。つまり、命の教育など、いろいろな目的で飼われているのだから、自分の動物は自分で世話をすることが基本になります。つまり、飼育を通じて子どもに伝えたいことは、命への配慮です。「命に

は休みがないこと、人間は毎日三度のご飯を食べているが、動物には土日にご飯の休みでよいのだろうか」ということを発信してほしいのです。子どもたちに、「お父さんお母さんが「明日は休みだからご飯も休みね。」と言ったらみんなどうする?」と聞くと、みんな「困る。」と口を合わせます。その困るという感情を逆手にとって、このようなことを子どもに伝えてくださいと言います。つまり、人も同じですが、「生きているものは毎日食べて排泄して、清潔なところで可愛がられて生活させないと生きていけない」ということを、子どもに伝えて欲しいと、親御さんに投げかけるわけです。

このことは、校長先生がはっきりと言うことができれば親御さんはきちんと受け止めます。何校かであったことですが、校長先生が春の保護者会で、本校の方針として4年生に飼育を位置づけているので、保護者の協力を仰ぎたいと伝え、学年主任が学年の集まりのところで同じことを言うと、保護者もその気になってきます。先ほどのアンケートの結果を見ても、大上段に構えて反対する保護者はいません。それを行うとする先生方の熱意が親御さんに伝わることが大事ですが、一般的に言えばむしろ、校長先生や先生方の方が反対する傾向は強いです。子どもたちにとっては、預かったりすることはうれしいことです。鷺見先生の学校でも見られますが、教室内飼育の動物を金曜日に持ち帰る子どもは、普段は「みんなのウサギ」だけど、「今日は私のペット」と喜んで持ち帰ります。かわいがる動物を家で週末に世話することには、子どもの負担感はほとんどなく、喜びが大きいのです。これは親御さんも同じで、やってみたら親子でよい時間を持てた、なぜ子どもが動物を気にするかがわかったとの反応が多く見られます。

4 衛生問題について

もう一つの大きな課題は「衛生問題」です。今、ニワトリが一斉に死んだらすぐに鳥インフルエンザだと疑う傾向がありますが、それはイタチに頭を食べられたためだったという事例もありました。「ウイルスは同じ種類の中で感染する性格」が強く、ヒトのインフルエンザでは、日本でも毎年千人も死んでいますが、鳥インフルエンザでは、5~6年かかるて、全世界で200人

くらい。鳥は何億羽と死んでいる。それくらい鳥から人には移りにくいのです。

それから、カメへの不安ですが、カメはいつもサルモネラ菌を持っているかというとそういうわけではなく、また口の中に入れたりしない、さわったら手を洗うなど適切な扱いをすれば大丈夫です。

それから、齧歯類への注意ですが、特に齧歯類から人間に移る病気がありますので、実験動物業者から無菌状態の動物を購入するのが良いのです。ウサギは別の種類で、人間に移る特別な病気はないので、安心してかわいがってください。

これは、鳩貝先生たちと行った調査ですが、教室内飼育で動物を飼っているか飼っていないか。それに対して学校の先生方はどう思うか。教室内飼育の利点は何か。欠点は何か。ということを聞きました。教室内飼育を行ったことがない先生方は、「良いことはあるけれども環境が不衛生になる。授業妨害になる。」と考えている方が多いです。ところが、実際に教室内飼育をしている先生方は、「確かに衛生不安や授業妨害は多少あるが、それにも増して良いことがたくさんある」と答えています。もしも衛生面に不安があるならば獣医師に聞いてみてください。都内自治体の教育委員会への調査でも、飼育動物から被害を受けた事例はなかったという結果が出ています。鳥インフルエンザを心配した人もいましたが、実害はありませんでした。同じように獣医師会の調査でも、人に「動物由来感染症の感染はなかった」ということです。ただ鶏を採血して調査したら、ニューカッスルという鳥の病気の抗体があったが、これはワクチンを前に接種していたんだろうとの一例と、破傷風でウサギが死んだ事例の2例がありました。破傷風について言えば、これは破傷風菌がウサギを殺したのです。ウサギがヒトに移すのではなく、土がこの菌で汚染されていた証明になったわけで、「人も土から感染する危険がある」との警告に過ぎません。つまり、都内では学校の動物から病気が移ったという事例は上がっていません。よって、気をつけるべきところは気をつけるけれども、科学的に対応していただきたいということです。

5 注意すべき病気と事柄

脱線しますが、狂犬病という病気がありまして、これは人を含んだほ乳類全般が感

染します。2003年の例ですが、その前2年間で人間が狂犬病で死んだ国が赤いところです（スライド画面提示）。日本はたまたま青くなっていますが、外国で日本人がコウモリに噛まれて、そのコウモリがウイルスを持っていたため、ワクチンを打ったとかいろいろな事例があります。この赤く塗られた国では、その当時は7万から10万人が、今は4万から7万人が毎年狂犬病で死んでいるといわれています。つまり、鳥インフルエンザを気にするよりも、外国に行ったときに、危険から避けられるような知識をもつことが大切で、動物が不衛生だからといって、日本の学校から動物を排除してしまえば、このようなことを勉強する場所も機会もなくなってしまいます。

これはジャンガリアンハムスターですが（スライド画面提示）、ハムスターでアナフィラキシーを起こすという話もあります。しかし、これは小型のハムスターに限ってのこと、ゴールデンハムスターなどの大きさのハムスターとは種類が違うということです。それから今、スローロリスというものが流行ってきていて、これも、噛まれてアナフィラキシーショックを起こすことがあります。このような外国の珍しい動物は野生動物の幼獣で、成熟すると噛むようになり飼育が大変になります。それで飼いきれずに野に放し、日本の野生種の存続に影響を与えるということが恐れられています。子どもたちには、このようなことも、きちんと教えていかなければならないと思っています。何校かで調査しましたが、「野生動物が手に負えなくなったら、野に放す」とほぼ全員が答えました。外来生物法もできましたので、そのようなことをしないよう、子どもたちに伝えてください。よろしくお願いします。衛生不安に対しては、正しい知識を得て科学的に対応するということが必要です。そして、注意すべきことは注意するということが肝心で、それが、将来きちんとした知恵を持った冷静な人間をつくることに繋がると思います。

6 獣医師の支援で、子どもに良い影響を

都内の調査では、教育委員会は、飼育の課題解決に一番効果があったのは、獣医師会との連携と答えています。都内では、18から19の自治体で獣医師会との契約ができる連携しており、ほかの地域でも協力体制があると答えているところが大半でした。

日本獣医師会もお手伝いいたします。日本獣医師会は、「学校飼育動物」を、「愛玩動物とは違う、家畜動物とも違う、子どもの成長を助けるために学校で飼育されている動物たち」と定義しています。先ほど長尾先生が命には役割があるとおっしゃいましたが、私たちも同じことを言っています。

子どもの育ちの中で、可愛がる飼育を遊びの中で保証すれば、「コミュニケーションがとれない」「命がわからない」などといったいろいろな課題が解決していくだろうと考えます。そして、動物飼育によって何が与えられるかというと、愛情を育んだり情緒の基礎をつくることができるようになると思います。それとともに、冷静な科学的視点、生物に対する知識の基礎をつくることができると考えます。まさに「幼少期の豊かな体験は、その後の幸せな人生の土台をつくる」と言えます。生活科の大御所である嶋野道弘先生がおっしゃったことですが、「子どもは国民みんなの共有の財産である」のですから、子どもの健やかな成長のために獣医師会も協力していきたいと思っております。保護者の方々も先生方も子どもの成長のために頑張っていただきたいと思います。

7 まとめ

効果的な飼育支援システムをまとめますと、まず、学校全体で飼育の意義を確認して、学校全体で飼育を維持する体制をつくります。たとえば、飼育担当の先生が携わっていると、その先生が何年も継続するというケースが出てきてしまいます。飼育を教育に位置づけて学年全体で担当すれば、飼育担当の先生は、1年間担当したら抜けられて、次の先生にバトンタッチするというシステムになります。そして2番目に、休日には保護者の支援を得るということ。これは絶対に必要なことなので、校長先生がしっかりと飼育活動の意義を確認して、保護者に発信できるようにすることが大切です。「命に休みは無い」と子どもに伝えるための我が校の飼育体験教育」だから、「子どもの成長のために、保護者の協力が必要」ということを訴えかけることです。それから、地域の専門家の支援を得ることも大切です。是非、みなさんが頑張っていただければと思います。

(社団法人東京都獣医師会)

